



生野産業会

「ちよろこい8ミリの寸切り（長ねじボルト）を使っているところがあつた。これじゃいかんわと思つた」

大阪市生野区の町工場「コバッシャー」の社長、小林良信さん(67)が大震災で倒壊した家屋の補助構造材「床束」をみたときの思いだ。床束とは木造建築の1階の床を支える束で、床下の柱のことをいう。

阪神大震災が発生したのは平成7年1月17日だった。当時、神戸市内のスポーツメーカーに野球の打撃練習用バットイングティーンを納めていた。その運搬の際に何度もみた倒壊家屋の床束は貧弱な寸切りを使っているところがあつた。「これじゃ、地震の揺れでひとたまりもない」。それ以降、震災復興支援につながる「ものづくり」、今後予想される大地震の際に滅災に

溶接のない床束「ツカエース」



地震に強い、溶接のない床束

コバッシャーの「ツカエース」

とにかく考えるのが大好きというコバッシャー社長の小林良信さん(右)。ものづくりで社会貢献を目指している。大阪生野区(志儀駒貴撮影)



コバッシャー【創業】昭和36年3月【所在地】大阪市生野区巽西3【従業員数】7人【業種】建築補助材製造【トリビア】平成24年8月にコバッシャーに社名変更。小林良信社長はコボックス、コーリン(小林)などいろいろ考えた末の決定だったが「前の小林シャーリングを縮めただけやがな」と指摘されという。「苦勞したのに」と少し不満顔をみせる。

大好きなものづくりで社会にも貢献

つながる「ものづくり」を日夜考えるようになった。そうして生まれたのが画期的な溶接のない直径14ミリの床束「ツカエース」だった。18年6月、25年3月にかけて3件の特許を取得したツカエースは溶接した床束と比較して強度と耐久性に優れ、横揺れにもパイプが360度動いて力を逃すことができる。また、溶接でない金型プレスで作るので安価で安定した品質を提供できるという。

評判はいい。「1度買ってもらえば、2度3度と買ってもらう」と小林社長はいう。価格でも10、15坪の鋼製ツカエースが1本335円など中国製にも対抗できる。仮に中国メーカーが分解して技術を盗もうとしても「肝心なところは絶対に無理」とい、「復興支援と滅災のためにも多くの人に使ってほしい」と期待している。

コバッシャーの前身、小林シャーリング工業所は昭和36年3月に先代の小林良次さん(89)が創業した。プレス機でスピーカーの磁石を入れるケースを作っていた。平成13年11月に継いだ小林社長は配管の継ぎ手であるフレキ管の製造を始めた。今や関西地域ではほとんどコバッシャー製。しかし、将来的なことや、震災後の仕事を通しての社会貢献という観点からものづくりを進め、ツカエースにたどり着いた。

「子供のころは数学が強かった」と小林社長。ツカエースの特許もそうだが、とにかくものづくりを考えるのが大好き。考えつけばすぐに自分で作る。ただ、「上代(定価)は先に決める。作れても高価な商品化できない」という。これまでバットイングティーンだけでなく、野球のグローブやシューズに名前を焼き付ける機械、靴磨き機、ゴルフの2番アイアンも自分で作った。考えはぼつと浮かぶ。今も日々、次のものを考えているが妻の福子さん(58)からは「自分の年を考えや」といわれるという。

先月、ツカエースの技術を用いた「コバッシャー耐震棒」を発売した。食卓用テーブルなどの下に取り付け、地震のときは潜り込み、耐震棒を持つことで揺れに耐え、テーブルの外にはじき出されないという。

「ものを作り、認めてもらい、買ってもらえれば本当にうれしい。若い人にもものづくりをすすめて」と小林社長。これからもものづくりを通じて震災復興、滅災など社会貢献をしたいという。

(野瀬吉信)

小さな町工場や事業所にもすごい技術力がある。ものづくりを中心にさまざまな技術を紹介する。まずは大阪市生野区の事業所で組織する生野産業会(会員数462社、平成25年3月31日現在)加盟の企業を取り上げる。

(毎月1回程度掲載)